

E t e r n a l B l a z e

2 n d V o l u m e

A u t h e r ティアナ・ランスター

「高町なのは一等空尉が先ほど、遺失物管理法違反の容疑で逮捕されました」

淡々とした口調でティアナに向かって告げたのは、モニター画面に映る女性アナウンサーだった。

今、フェイトのオフィスにある時計は18時を少し過ぎたあたりを指している。モニター画面では夕方のニュースが軒並み始まった時間だったが、どの局も話題のトップは、なのはの事件一色になっていた。

「はあ〜」

フェイトのオフィスに溜息が響き渡る。

ティアナは、ホテル・アグスタから帰還したあと、休む暇もなく、この部屋に戻ってきた。やらなければいけないこと、そして考えなければいけないことが山積みで、何か

ら手をつけて良いのかよく分らない。

ただでさえあんな事があつた後だというのに、帰りのヘリの中ではミラノから一枚の紙を渡されていた。ティアナがヘリにのる前、ジャロックの手伝いをするよう言われたミラノが必死で涙を堪えているような悲しげな表情をして、ティアナに渡したのがなんだかとても印象的だった。

そんな悲しみを象徴するかのような書類を、ティアナは半ばなか呆然ぼうぜんとしながらも受け取り、それ以来ずつと手に持っていたため、紙は汗でよれよれになっていた。そんな、ただの紙切れ一枚だというのにティアナにとってやたらとそれが重く感じられていた。

なぜなら、そこに書いている文章は、ティアナにとって触れているだけでみぞおちのあたりがキューツと締め付けられそうになることが書いてあつたからだつた。

そんな手に持つている紙を見ていると、モニターからは女性アナウンサーがニュースの続きを読み始めていた。

「高町容疑者は、本日16時頃、ホテル・アグスタのオークション会場倉庫付近で爆発事件を引き起こし、高エネルギー結晶体であるロストログアを盗み出した疑いです。警察は、高町容疑者の過去5件による高エネルギー結晶体消失事件との関連性があると見て余罪よざいを追及する方針です」

「嘘だッ！」

おもわず叫んだ。

ティアナは、ここまで聞くと出来ることならモニターのスイッチを消して、部屋へと戻り、温かいシャワーを浴びてから、ふかふかのベッドで、ふて寝を決め込みたいと思ったが、ここで逃げ帰っては、自分の想い描いている未来とは違う結果になりかねない。その衝動をぐつと我慢した。

「ここで、高町容疑者を逮捕したアリダー・ジャロツク提督による記者会見が始まる模様です。高町容疑者逮捕の真相がここで明らかにされるようです」

モニターの中では、颯爽とジャロツクが登場すると共にフラッシュがたかれ、報道陣が彼の周りをとり囲んだのがモニターから分った。

そんなジャロツクの顔は、フェイトや他のみんなとは裏腹に、今まで見せたことがないような、笑みをうかべている。

「静粛に」

ジャロツクは突然、大きく目を見開いて報道陣を一喝すると、ザワザワしていた辺りの空気がピンと張り詰めるのが画面越しから伝わった。

あたりにいた報道陣が威圧感に圧され一斉に静まりかえったのを確認すると、ジャロツクはコホンと咳払いを一つして勝ち誇ったかのように語り始めたのだった。

「本日、16時8分、時空管理法に定めるロストログアの不正使用、および暴走行為、な

らびに高エネルギー結晶体の窃盗^{せうとう}、捜査官の誘拐拉致監禁の容疑で、高町なのは一等空尉を逮捕した」

そこまでジャロックが語ると、たくさんのフラッシュの閃光^{せんこう}と共にカメラのシャッター音の嵐が、あたりに飛び交った。

そんな、シャッター音を皮切りに、報道陣からジャロックに向けて質問の嵐が投げかけられる。

「何か証拠はあるんですか？」

「高町容疑者の犯行動機はなんでしょうか？」

「高町容疑者の様子はいかがですか？」

「静粛に！」

ジャロックは、次々に浴びせかけられる質問に、少々面倒くさいといった怠惰^{たいだ}な面持ちで、報道陣達に静かにするよう促^{うなが}した。

「何らかの既得損益があったと言うことでしょうか？」

「静粛に！」

突然、モニター画面がニュース番組の女性キャスターへと変る。記者会見の現場が荒れているのか、カメラ映像はスタジオへと戻り、女性キャスターは深刻そうな顔をしてこちらを見つめていた。

「エースオブエース、誰もが認める無敵のエースとまで称された高町容疑者ですが、一体どうしてこのようなことになったのでしょうか？ この時間は番組を変更してお伝えしたいと思います。アニメ銀魂は次週の放送となりますのでご了承ください。では一旦CMの後、記者会見の模様をお伝えします」

「はあ〜」

ティアナは、報道番組がCMに入ると、さらにまた重い溜息をついた。フェイトだってティアナだって、なのはがジャロックに逮捕されるところをむざむざ黙って、見ていたわけではなかった。

なのはさんがそんなことをするはずがない！とティアナは何度もジャロックの前で訴えた。機動六課の時、彼女の教導訓練を受けたことを伝え、無実を訴えても身内鬮ひいきと罵ののしられただけだった。挙げ句の果てには、執務官補の分際で提督に意見をすると何事だと怒鳴られた。その言葉に、おもわずカッとなりジャロックに平手打ちをだしそうになったが、その途端、フェイトに腕を押さえられ手をギョツと握られた。

ティアナはそこで我に返った。第一、なのはが何もしていないという証拠をジャロックに提示することが出来なかったのだ。

フェイトもまた、ジャロックに意見をしていたようだったが、ジャロックは証拠が揃っているの一点張りだった。異論があれば法廷で争う。とまで言われていた。